

武蔵野



武蔵野支局 〒180-0006
 武蔵野市中町1の13の1 3F
 電話 0422(51)3131
 FAX 0422(51)3133
 musasino@yomiuri.com
 都内版編集室 電話03(3217)1465・1466
 江東支局 電話03(3631)6116
 立川支局 電話042(523)4477
 ホームページ
 www.yomiuri.co.jp/local/

購読は
0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
 【折込チラシ】 0120-03-4343
 【読売旅行】 03(5550)0666

3月14日(日曜日)
 旧 2月2日<先負>

通日	73		=東京標準=		
月齢	0.7 (正午)		満潮	5.48	
日出	5.54	日入	17.48	干潮	17.30
月出	6.33	月入	18.30	干潮	11.46
(大潮)					

あすの暦

桃井第二尋常小学校(現杉並区立桃井第二小学校)の校歌の作詞を担当した与謝野晶子は、1903年(昭和12年)2月6日、校歌披露式で「紫の一もと故に武蔵野の草はみながら哀れと思ふ」という歌を詠みます。この歌が全集未収録なのは、古今和歌集の「紫のひとつとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれと思ふ」と2字違いだからでしょう。なぜ「見る」を「思ふ」にしたのでしょうか。

罪の恋すべてが愛しく

文人の武蔵野

与謝野鉄幹・晶子夫妻 ①



杉並区立桃井第二小学校前に立つ校歌の歌碑

紫は武蔵野特産の植物で和歌の世界では枕詞です。「紫」が象徴する「武蔵野」は、伊勢物語や源氏物語では罪の恋の舞台でした。

堺の老舗の和菓子屋で生まれた鳳晶子(1878~1919)

42年)は、源氏物語を愛読する文学少女でした。1901年の6月、22歳の時に家を捨て、渋谷村の与謝野の家に身を寄せ武蔵野の人になりました。8月に歌集『みだれ髪』を刊行して文壇の注目を集め、10月に寛と結婚して与謝野晶子となりますが、直前まで寛は妻帯者(事実婚)でした。寛は鉄幹名で活躍中の歌人でしたが、同年3月に刊行された怪文書では女性関係などを誹謗されました。それから34年、寛は校歌の作詞を依頼されますが、急逝により晶子が代わりを務めます。晶子が借用した本歌には、愛すべき対象(紫一本)があればそこ(武蔵野)にあるものすべてが愛しく見えるという意味があります。晶子にとっての「紫のひとつ」とは罪の恋から始まり武蔵野で全

うした寛との関係を指し、より心を込めて「思ふ」としたのではないのでしょうか。次回からは、夫妻で詠んだ40作以上の武蔵野の歌や詩を紹介しながらその文学的生涯を追ってみたいと思います。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「みだれ髪」

20世紀の初頭に刊行された歌集『みだれ髪』は、内容と装丁の斬新さと、歌の詠み手への興味関心により、嵐のような反響を呼びました。新しい時代の幕開けにふさわしいこの画期的な文学の誕生は、晶子の才能とそれを見いだした伴侶と、意匠を任された藤島武二らによって実現しました。



(与謝野晶子著、新潮文庫) みだれ髪

与謝野晶子